

第5章 (2017年 北の年)

「北」朝鮮ミサイルの「北」海道沖落下や九州「北」部豪雨などの災害から、平和と安全の尊さを実感した年

(公益財団法人 日本漢字能力検定協会が発表から)

2017.1.16 きょうの朝日歌壇から

職業に無職は無きと思えども職業欄に無職と書きぬ

(京都市 吉田一夫) 選者：永田和宏 選者評：なし

⇒作者は何歳なのだろうか。定年退職者の場合だと職業欄の「無職」と書くことに大きな抵抗はないだろう。若年者だと「職業に無職は無き」の心的強制が働き、「無職」と書くことに恥ずかしさを感じるのかも知れない。

今年の年賀状に「体調のことなどもあり隠居しました」と書いた友人がいる。隠居…なるほどいい言葉だ。

隠居は、民法旧規定で、戸主が生前に家督を相続人に譲ることを隠居と言ったが、一般的には、勤めや事業などの仕事を退いてのんびりと暮らすことをいう。高齢社会になり、隠居は今や死語同然の扱いだ。「楽隠居」。「事業を長男にまかせて隠居する」。

後期高齢者にもなれば「隠居」もいい。地区の役員、地域福祉のお世話、地区のお寺さん、お宮さんの役員など、ご隠居さんの出番だ。老々夫婦になっても、ひとり老人になっても「ご隠居」さんと呼ばれてみたいものだ。

2017.1.31 首長と議会 今日の日経・経済教室から

地方分権一括法の施行(2000年)により地域経営の自由度は飛躍的に高まった。決まっていることを実施する行政だけでなく、様々な利害を調整し統合し方向づけること、まさに政治が重要となった。多くの自治体で財政危機が進行する中では「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」を選択しなければならぬ。それはまさに政治だ。

⇒地方自治や地域経営のあり方は政治が重要となったことで大きく変化した。今日の日経・経済教室で、山梨学院大学教授・江藤俊昭先生が「議会を地域経営に組み込め―首長と新たな関係模索を」について小論を書いている。

ポイントは以下の3点。①首長と議会は癒着も不毛な対立も避けよ ②議会を討議と決定の場にすることが必要 ③政党が分権化しないと中央集権制は継続。分かりきったことばかりだが、地域政治論に係る重厚な内容がぎっしり詰め込まれている。一部引用して意見を述べる。

・現行の地方自治制度の下での議会の新たな役割、議会と首長の新たな関係を模索すべきだ。議員も首長も直接住民が選挙する現行制度では、一方の極に、議会と首長が癒着することで議会が追認機関化し役割を果たせない経営がある。他方の極に、議会と首長が激しい対立をただ繰り返す経営がある。前者は監視が効かず、後者は不毛な対立が日常化し、どちらも住民福祉に逆行する。両極とは異なるもう一つの方向を探るべきだ。

それは最近広がりを見せている議会基本条例の中に刻まれている。閉鎖的な議会から住民に開かれ住民参加を促進する住民と歩む議会、質問・質疑だけの場から議員問討議を重視する議会、それらを踏まえながら追認機関ではなく首長などと政策競

争をする議会、という3つの原則だ。

⇒地方自治には、以下の3つの選択肢がある。

- ①議会と首長が癒着することで議会が追認機関化するケース
- ②議会と首長が激しい対立をただ繰り返すケース
- ③二元代表制による地域経営のケース

具体的には、①議会と首長は正当性では対等 ②政策課程全体にわたり議会と首長が政策競争 ③政策課程全体にわたり住民も参加する。

この3つの選択肢の中で③のケースが望ましいことは万人の認めるところである。ただ、これを可能にする条件は果たして整っているだろうか。

特に、広範な行政知識に加え、スタッフの数や情報の非対称性が、議会と首長の政策競争において首長側有利に働くことが圧倒的に多い。

そんな状況の中で、「議会が直接住民の声を聞き、監視や政策提言ばかりか、決算審査・予算要望や条例案の提出・審査にも生かす」ことが理想ではあるが、困難なことも多い。その上、議員も首長も、選挙で選ばれていると言っても、プロフェッショナル（専門職業人）ではない。今後の地方自治制度の発展のための議会改革に期待したい。

2017.2.2 私とポリオ ロータリーの友平成29年2月号から

ポリオワクチン接種の成果により2000年に根絶宣言をした日本では、ポリオはすでに忘れられた存在になり、現在の整形外科の教科書には、ポリオの病名はありません。

私は、昭和19（1944）年の夏、2才半のとき、三重県下で大量発生した脊髄性小児麻痺（ポリオ）にかかりました。当時、父

は津の33連隊の職業軍人でしたから、陸軍病院で診断、若干の治療を受けた後、京大病院へ3か月余り入院しました。

戦時下にもかかわらず、十分な治療と両親の看病の甲斐あって、大分良くはなりましたが、足の方は余り丈夫にならないまま就学年令をむかえ、1年の就学延期で小学校へ入学。このとき、松葉杖では将来困るであろうというので、今の1本杖に変えさせられております。

3年生になってからは、父が神戸で買ってきてくれた子ども用自転車で通学。さらに、中学2年生の時に大阪市立大学整形外科で脚長差を調整する手術を受け、後に補装具をつけて歩き一時は杖なしで歩いていたのですが、身体に不自然な力がかかり、疲れるものですから、やめてしまいました。

私は義務教育の1年就学猶予を受けたため、中学3年生から、補助エンジンのついた自転車、いわゆるバイクに乗るようになりました。その後、乗用車に乗るようになり、すでに75歳になりました。

28歳で帰郷後、税理士事務所を開業。青年会議所、ロータリークラブ会員の皆さまと長いお付き合いがあり、仲間の皆さまから、いつもお誘いがあったて、何回も世界旅行など楽しむことができました。

これまでの人生を、いつも、いつも私の周りの「良き理解者」に助けられて生きてきたこと。その方たちのおかげで幸せな人生を送ることができたことに感謝しています（小野加東 R C 西村勝彦 第2680地区 兵庫県）。

※国際ロータリーは、現在 End Polio Now 運動を展開していますが、過日行った卓話の要旨が会員向け公式雑誌の今月号の特集記事で採りあげられました。

2017.2.13 日経歌壇から 日経2/12

「インフレは良いことなの？」と訊く子あり日銀記事と母親見比べ (青森 南 勉) 選者：三枝昂之

選者評：インフレ 昔は物価が上がって好ましくないと言ったものだが。

⇒「インフレは良いことなの？」と訊いた子どもは、日銀が2013年4月から異次元金融緩和政策を採用して、2%のインフレ目標を実現すべく金融政策によりてこ入れしていることを知っているのか。知らないのか？

「昔は物価が上がって好ましくないと言ったものだが」という選者は、いつの時代のことを言っているのか。

私たち高齢者世代は1980年代後半の「バブル経済」と90年代はじめの「バブルの崩壊」、さらにその後の「失われた20年」を経験した。バブル経済では、一般物価水準が上昇を続ける「好ましくない」インフレを経験した。

1990年代に入り、高金利政策と景気の減速により、地価と株価は急激に値下がり経済が停滞した。その後、継続的に一般物価水準が下落し続ける「好ましくない」デフレが20年近く続いた。

インフレ理論について経済の基本を簡単に整理しておきたい。

インフレもデフレもどちらも行き過ぎはよくない。現代では2%程度の緩やかなインフレが継続することが望ましいというのが世界共通の理解だ(大学4年間の経済学 井堀利宏)。

①インフレ率が上がる→生産量が増加する→GDPが上昇する→景気がよくなる…これがインフレを供給側から見た理論(供給曲線)。

②インフレ率が上がる→需要が減少する→GDPが下落する→

景気が悪化する…これがインフレを需要側から見た理論(需要曲線)。

③インフレ供給曲線とインフレ需要曲線が一致するところで、生産量と需要量が一致する。

④この一致点を上振れさせるのは、政府支出、下振れさせるのが雇用水準。

したがって、拡張的財政金融政策と雇用水準がインフレに大きく影響を与える。日銀の異次元緩和では2%の物価目標は達成できなかった。

今は、日銀の「異次元の金融緩和」ではなく、「成長戦略」の奏功が一番重要。また、現時点においては、一時的インフレ効果を狙う拡張的財政政策には慎重でなくてはならない。これがいまの私の意見。さて、みなさん如何お考えですか。

2017.2.22 朝日歌壇から 朝日2/20

試験場へ消える娘を見送って急いでむかう湯島天神

(富山市 松田由紀子) 選者：永田和宏 選者評：なし

⇒すでに私立大学の入試が始まっている。今週末から国立大学の入試が始まる。試験場へ消える受験生を送り出す親や祖父母にできることは神頼みくらいか。

・「ところで、『いま、なぜ大学に学ぶのか』という素朴な疑問から、大学進学と将来の職業とのかかわりについて考えてみたいと思います。

第一のケースは、医師や看護師、薬剤師のように、その職業につくためには、その専門分野の大学の卒業が前提となっている職業群があります、この職業につくためには、大学入試の時点で、将来の職業が決められ、途中からの転向は、よほどのこ

とがない限りあり得ません。

第二のケースは、弁護士、会計士、高級技術者のように、その職業に就くためには、大学卒業が必ずしも前提になっていませんが、実質的には、大学卒が極めて有利な職業群があります。企業や官公庁の管理者を目指す人の多くも、この分野に入ります。

第三のケースは、大学入試と将来の職業を、左程大層に考えておらず、とりあえず大学に行きたい。なぜなら、大学には十分時間がある。将来何の職業に就くかは、まだ決まっていない。自分の将来の職業や目的は、そこで発見すればよいと考えている場合です。このタイプも多い。

以上、大学進学と職業について、三つのケースに分けて考えてみました。将来どんな職業生活を送るにせよ、本校生徒が社会の有為な人材として、強くたくましく、人生を切り拓き、たった一回限りの人生を意義あるものとするために、少し手を伸ばせば届く一段上の大学を目指して努力するのは、極めて有意義なことであります。

『いま、なぜ大学を目指すのか』と考えた場合、それは受験勉強という、もはやあと戻りのできない苦しい競争に耐えて、将来の職業生活における自己実現のために、可能な限りの挑戦をし、考え、鍛え、本物の自分自身を創っていくところに真の意義が認められることを忘れてはなりません。なお一層の努力をする。あとは運を引き寄せ、目標の大学に合格することです。

いまこそ頑張るときなのです。みなさまの希望の進路達成をお祈りいたします」(小野高校教育講演会:会長挨拶・PTA会報 1994/7/22から)。

23年前に書いた文章を読み返している。この20年間に変わっ

たことと言えば、進学率の向上だ。現在では50%を超える若者が大学に進学する。

民進党は昨年12月、次の衆院選に向けて「幼稚園や保育園から大学までの教育費を無償化」する公約の原案をまとめた。2018年度から低所得層を中心に、返さなくてよい国の給付型奨学金が始まる。受験生諸君、頑張れ！

2017.02.27 今日の朝日歌壇から

答弁は読むものですか「云々」とせめて漢字にルビ頼んだら
(三鷹市 山室咲子) 選者：永田和宏

選者評：首相答弁には笑えたが、私も「号泣」を「ごうりゅう」と読み間違えたことがある。

⇒あとから考えると忘れられない恥ずかしい読み間違えをすることがある。この場合、聞いた人はことさら指摘することもなく「ふっふっふ」と笑い流せばよい。

ところで、この歌の背景を簡単に説明すると「国会でにわかには与野党の論戦になっている「プラカード」を巡る問題。安倍首相が前日の施政方針演説で「国会でプラカードを掲げても何も生まれない」と発言したことに対し、民進党の蓮舫代表が代表質問で抗議。自民党も野党時代にプラカードを掲げていたことを指摘した。これに怒った安倍首相はこう答弁。

「あくまでも一般論。民進党とは言っていない。思い当たる節がなければ、ただ聞いていればいい。(ひときわ声を張り上げて)『訂正でんでん』というご指摘は全くあたりません」(朝日新聞 1/26)。

国会や自治体議会では、官僚や自治体職員により「答弁書」、議長には「口述書」が準備される。これを読む慣習は、特に問

題にすることでない。専門知識や数字、用語の間違いを回避するためには必要なことだ。議会開会中は、議会裏の部屋に大勢の職員が資料等の「ペーパー出し」のため待機している。伝令が走り回っている姿はテレビでもよく見る。

安倍首相は「答弁書」の朗読やプロンプターを使うことが比較的少ない首相だ。しっかり前を向いて答弁している。始めから終いまでの原稿読みではない。

知人に大卒後大手商社に入社、子どもが幼少期中東アフリカのドバイに家族全員で6年間滞在。英語生活にも慣れ、大人の生活に特段問題はない。問題は子どもの教育だ。知人の子どもは日本人学校に入らず、ドバイのナショナルスクールに入学した。授業が英語で行われることに問題があるわけではない。日本語と日本の歴史等を学ぶ社会科の授業がないのだ。

帰国後、子どもには高度なネイティブ言語と母国の歴史がどれほど大切か、思い知らされたようだ。ただ、高校・大学では苦勞したようだが、今春、帰国子女特別入試によらず、一般入試で東京の有名私大に合格できたと喜んでいて。

高校の「古文」の授業以来、詠歌に高い教養を必要とする短歌に「人の心を動かせる情景や情緒」などを期待している私には（川柳のような）作歌も新聞歌壇に掲載されると優秀歌になるのだと驚く。

しかし、この歌は「ふっふっふ」の世界最高のユーモアかも知れない。

2017.3.6 今日の朝日歌壇から

白菜がなにゆえ結球しないのかにはか農夫はパソコンひらく
（ひたちなか市 篠原克彦）選者：永田和宏 選者評：なし

⇒一昔前なら、「白菜がなにゆえ結球しないのか」については、専門農家は種苗会社の解説書を読み、「にはか農夫」は近隣のベテラン農家に教えを乞うただろう。

今は違う。「パソコンをひらく」のだ。農業雑誌でもJAの機関紙でもない。

・人は情報で生きる。その働きは自然環境のようにかけがえがない。汚染されていないか。ゆがんでいないか。見分ける目を育てるのは、そう簡単ではない（今日の日経「コラム・読むヒント」から）。

⇒パソコンやスマホの普及で、情報の伝わるスピードが著しく早くなり、その上、範囲や量がどんどん広がっている。さらに利用方法さえ誤らなければ恐ろしく正確で有用だ。

新聞やテレビ、ラジオ、書籍、雑誌、携帯、インターネットなど「情報の乗り物」であるメディアを通じて、膨大な情報が世界中を飛び交っているが、その主流媒体は紙ではない。

・政治、経済、社会、文化など世界で何が起きているか広く目を通す。情報を身につけ、生かすには、気になった記事を切り抜く。ぼんやり読むのではなく、心にかかる問題を考え、疑って自分なりの答えを出すのがコツなのだ。

⇒新聞のない時代の情報を伝えるツールは「瓦版」、その後、新聞、さらに「スマホを利用する」人が増えている。トランプさんは「SNSを巧みに活用して」米大統領選に勝利したことは記憶に新しい。

私は日刊紙を2紙購読しているが、もちろん、パソコンやタブレットは毎日利用している。最近では新聞を読まないどころか、新聞をとっていない世帯が41.5%あるというのに…（メディア世論調査から）。

・忘れてはいけないのは、情報は人間が意味を与え、つくり、使うものだということだ。これによって人が動き、ついには、世の中が変わることもある。

⇒地域選出の衆院議員や県会議員がSNSを利用して発信している情報を毎日読む。市長や市会議員の報告も見る。自治体のホームページもこまめに読む。

情報発信者に伝えておきたい。多くの国民がパソコンやスマホで情報を受発信している。「私はパソコンやスマホがきらいです」では今や浦島太郎。情報は利用する人も、発信する人も「生きるツール」なのだ。

ただ、本も新聞も読まない若者が多い。テレビの番組は高齢者向け番組と高齢者向けコマーシャル。ラジオは、眠れない夜に深夜放送を聞く。だから、パソコンとスマホ。これでは何だかさびしい気がしないでもない。

毎月、各戸配布される多色刷りで美しい市の広報紙や各種団体機関紙がどの程度読まれているか、調査してみるのもよい。地区寄合の議題や出欠通知が紙の媒体による回覧板からスマホになる日も近い。世の中、変わっているのだ。

2017.3.21 お墓参りと改葬 今日の日経から

年間130万人の人が亡くなる多死社会。少子高齢化で去りゆく人が増える一方、見送る人は減りつつある。ところが、墓が遠くにあり、お参りにいけない。住まいの近くに墓を移したいと考える人は多い。墓の引っ越しである『改葬』は近年増加傾向にある。

⇒先日の連休を利用して都会に住む子どもたちが配偶者と孫を同伴して先祖のお墓参りに帰ってきてくれた。家内は毎年欠

かさず生まれ在所に墓参りに帰る。当然のように続いていることだが、これがかなわなくなる人が増えている。

・「高齢者だけの世帯や、未婚・離死別で配偶者や子がいなくなり、先祖代々の墓を継がない例がこの30年で増えた。これだけなら個々の家庭の問題だ。しかし見逃せないのは高度成長期以降の都市部への人口集中が、無縁墓の増加につながっていること。国立社会保障・人口問題研究所の11年の調査では、居住地と出生地がずっと同じ人は1割程度しかいない」（日経130万人のピリオド（9）2016/4/11から）。

⇒先日、丹波市に住む知人が事務所にお見えになり「改葬」の話がされた。その方のお墓は600年続いた由緒ある大きくて立派なお墓だそう。ただ、2人いる本家筋の相続人となる子どもが大学進学後、首都圏で生活し、生まれ在所に帰ってくることはない。自宅の処分はできたが問題はお墓だ。「自分の代で無縁にしてはご先祖さまに申し訳ない」と、思い悩み、地方に住む遠縁の方に今後の「墓守」を依頼されたが、依頼された方が高齢のためそれもかなわず改葬を決意されたそう。

改葬が決まれば、①新しい墓を決め、管理者から「受入証明書」をもらう。②遺骨と石碑をまるごと移動するのか、遺骨だけを移動するのか、遺骨は全部を移動するのか、一部だけかなどを決める。③自治体から「改葬許可証」をもらう。④魂抜きなどの儀式を行い、遺骨を取り出す。⑤魂入れなどの儀式を行い、新しいお墓に遺骨を入れる。改葬はおおむねこの順に行く。

墓の移転後、墓石などを解体するが、丹波市の知人の先祖墓は、業者に頼んで16基あったすべての墓石を粉々にして碎石にされたそう。その後、更地にして管理者にお返しされた。

改葬には、墓地理葬法に基づく書類の提出が必要だが、これ

以外に特に定まったルールがない。ただ、お世話になった寺への離壇の配慮は必要だ。

人口の都市集中で地方の人口が減少し、耕作放棄地や相続空き家が増え、無縁社会や改葬が話題になる。地方の疲弊で営々と築かれてきた人間生活の原点が崩れていくのはさびしい。

2017.4.21 最新・中高生の卒業後の状況

兵庫県の中学校、高等学校卒業生の卒業後の状況は、以下のとおりであった（直近のデータによる）。

- ①中学校卒業者の高等学校等進学率は98.8%（前年は98.7%）であった。
- ②中学校卒業者に占める就職者の割合は0.2%（前年は0.2%）であった。
- ③高等学校卒業者の大学等進学率は60.7%（前年は60.6%）であった。
- ④高等学校卒業者に占める就職者の割合は13.9%（前年は14.2%）であった。

（兵庫県の平成29年度学校基本調査結果 2017/12/19 兵庫県教育委員会）

⇒私が「地方の高校生の80%が卒業と同時に都会に出て行く」根拠とするのは以下のデータによる。

高等学校卒業生（中等教育学校後期課程卒業生を含む）の進学率

- ①大学・短大進学率（現役）は54.8%（前年度同率）。
- ②大学（学部）進学率（現役）は49.6%（前年度より0.3ポイント上昇で）過去最高。
- ③専門学校進学率（現役）は16.2%（前年度より0.1ポイント低

下）。

- ④大学・短大進学率（過年度卒含む）は57.3%（前年度より0.5ポイント上昇）で過去最高。
- ⑤大学（学部）進学率（過年度卒含む）は52.6%（前年度より0.6ポイント上昇）で過去最高。
- ⑥専門学校進学率（過年度卒含む）は22.4%（前年度より0.1ポイント上昇）。
- ⑦高等教育機関進学率（過年度卒含む）は80.6%（前年度より0.6ポイント上昇）で過去最高

（平成29年度学校基本調査（確定値）の公表について 文部科学省・2017/12/22）

⇒昨今の新聞紙上では、義務教育以外の教育機関の教育費の無償化問題や、大学の経営問題など、高等教育の状況の変化が報道されるが、地方の疲弊が若者の大学等への進学による人口流出にあることもよく考えたい。

・地方に残り、地方に戻る若者を増やす政策はもちろん、移住・定住受入政策ばかりか、山や川、歴史、特産など地方の資源を守り、人口が減少しても消滅しない「地方の将来ビジョン」づくりが求められる。「新人口推計」を有効に役立て、地方自治体の50年後のあり方を（数字で）考えたい（私のブログ2017/4/11新人口推計と地方の人口から）。

2017.4.24 今日の朝日歌壇から

入学式を終えてバイトに子は急ぐ新入生でにぎわう店に

（春日市 伊藤 享） 選者：佐々木幸綱 選者評：なし

⇒入学式を終えてすぐバイトに行くこの子は大学新入生だろう。富裕層の子どもがファッション感覚で大学入学と同時にバ

イトを始める子もいるだろうが、作者は違う。入学早々から生活費や学費を稼ぐのだ。

高卒生の過半数が大学に進学する今日「大学など行かなくてよい」など誰も言えない。新入生でにぎわう店に悪びれることもなくアルバイトに行き、働く子ども達に心から頑張れと言ってあげたくなる。

半分は中三半分は高一まぶしい原宿歩く春休み

(富山市 松田わこ) 選者：高野公彦、馬場あき子

選者評：なし

⇒義務教育と家族のしほりから外れ、あこがれの高校生になり、初めて都会の繁華街に行く。この子は16歳になったばかりだ。聞くもの見るものがすべて新鮮だろう。

君らのすることは基礎教育の仕上げと強靱な身体づくりだ。日本人の基礎教養は高校時代で固まる。高校時代にしっかりと、英語、国語、社会の基礎を会得した者は、英文購読ばかりか会話の能力も身に付く。国語や社会は、高校程度のレベルをしっかりと勉強すれば、日本人の教養は十分だ。

その上で、好きなこと、したいこと、得意なことを見つけて、行きたい大学を目指して本気で勉強する。これが高校時代だ。人生でこれほど可能性の期待が高まることはない。

もう1つは、身体づくりだ。「たとえ東京大学を出て、高級官吏になって出世しても、40やそこらで死んだらあかん」。これは関学教会で、(関学中学部初代部長)の矢内正一先生が話されたお言葉で、その通りだ。

2017.5.6 今日の日経歌壇から

我が家には「忖度」という言葉はなし催促をしてやっとな晩酌

(川口 亀山幸輝) 選者：三枝昂之

選者評：今年の流行語になりそうな「忖度」を暮らしの中に生かしてたのしい。

⇒以前に「忖度」をテーマに所感を書いたことを思い出している。ただ「忖度」の通訳の英語表現(2017/3/27)、これは未だによく分からない。直訳してEmpathy UnderstandingかEmpathic Understanding(共感的理解)くらいがよく合うような気がする。

・「上役の意向の心中をおしはかること」は、公務員ばかりかサラリーマンなら、みんな経験していると言ってよい。これは被雇用労働者社会では、渡世の常識みたいなものだ。「力を持つ上の者の気持ちを先取りし、機嫌を損ねぬよう処置すること」もできないようでは、仕事も出世もおぼつかない。

ここで、重要なことは上役の「機嫌を損ねぬよう処置する」際、その意図や内容が不純であると考えるときは「忖度」しない「耳かき一杯」程度の勇気が必要だ。この勇気は、後に上役を守り組織を守ることになるのだ。

・そもそも、忖度にはどんな意味が込められているのか。広辞苑は「他人の心中をおしはかること」。米ユタ大学の東照二教授(社会言語学)は「自分で言い切らないで相手に推量させる。あえて言葉にしなくても価値観を共有し合っていることを示すため、忖度が良い意味で使われることもある」と説明する。

最近使われた忖度はどうか。「側近」が意向を推察する様が「忖度政治」と称された民主党政権時の小沢一郎幹事長(当時)。「NHK内で会長の考えを忖度する動きが広がる」と指摘されたNHKの初井勝人前会長。「権力者の意向を推量するといった悪い意味で使われる機会が増えている」と東教授は指摘する。

甲南大学の阿部真大准教授(社会学)は「忖度文化は、社会が同一の価値観で動いていた時代には効率的に働いたシステム」と言う。「考え方が多様化した現代では、忖度が前提の『言わなくてもわかるでしょ』という道理は通じない。霞が関や永田町などムラ社会の色が濃いところにしか残っていないのではないか(朝日新聞2017/4/5から)。

⇒私の情緒的な感想と学者による言葉の意味を併せて考えると、忖度の前提「言わなくてもわかるでしょ」が力を持つのは晩酌くらいか。日常会話で相手に対する善意や思いやりがあれば「忖度」するのはごく自然なことだ。

言葉は使う側や受ける側の解釈次第でよく捉えられたり、悪く捉えられたりするのだ。ただ、使う側次第で言葉の意味合いも変わるのが微妙。

催促をしてやると晩酌が出てくるのは、相方の健康に対する「忖度」か、いじわるか、それとも、無関心か。顔色を見て判断する！

2017.5.27 今日の日経歌壇から

年齢はあまり関係ないようだ会議で分かる見識の有無

(三田 池水 徹) 選者：三枝昂之

選者評：出席者の顔ぶれが見えてくるようで納得。

⇒この歌にも選者評にドキッとす。後期高齢者になると、たまに出る会議でも、積極的に発言、質問することが億劫になり、会議の成り行きを見守っていることが多い。そうすると「すごい見識だなあ」と感心したり、「如何なものか」とあきれ発言が見えてくる。

見識や識見は「物事を正しく見分ける力や優れた意見」のこ

とを言うのだろうが、前段の説明や解釈が長いと折角の発言が「理屈っぽく」なる。その人の性格や人格を表す簡潔で要領を得た発言はいつになっても難しい。

大学の青木倫太郎先生にゼミ旅行の席で「どんな会議に出ても、最初に自分の年齢、ポストをよく考え、どの位置に座るべきかを考えなさい」。

次に「若いときは、冒頭に発言しないで、会議の進行をしっかり聞いて、勇気を出して一言だけ発言しなさい。そうすると議場をはっとさせられる」。

「熟年や中堅ポストになれば、自説をしっかり述べなさい。これは訓練です」。

老年になれば「聞き役とまとめ役に徹しなさい」。これは余談だが「相応の年齢になれば「閉めの挨拶や乾杯の音頭」くらいは頼まれるようになりなさい」と教えられた。

最近では、長時間の会議に出席しても一度も発言しない人も多いが、高校や大学の講義でもあるまいし、時間の無駄ではないだろうかと思わなくもない。ただ、国会や地方議会では会議のルールが厳しく、発言する機会に恵まれない人も多いが、期数にこだわらず存分に発言してほしい。

「年齢はあまり関係ないようだ 会議で分かる見識の有無」というこの歌の作者はよく勉強され、会議慣れされた立派な方だと思うが、案外、普通の方かも知れない。こんな方がどの会議にもいるのだ。後期高齢者になり出席すべき会議も少なくなったが、どこにでも、何でも、よく見ている人がいるものだと反省している。

2017.6.19 今日の朝日歌壇から

今ここで泣いちゃダメって思う時人って少しずつ強くなる

(富山市 松田わこ) 選者：馬場あき子

選者評：作者も高校生になった。泣くということが自らの甘えにもつながることを自覚し始めたのだろうか。下句に成長の意識が見えるのも魅力。

⇒これが高校生の作品であれば、しっかりした子だなと思う。後期高齢者になると、今までの泣きたくなる悔しい思いが思い出されることがある。「たぶん、今ここで泣いちゃダメって思いの都度強くなってきたのだろう」。

・昨年、谷川浩司永世名人に会った時、「『負けました』と頭を下げられない子は強くなれません」という言葉に強く感銘を受けた。

子どもはなかなか「負けました」とか「ごめんなさい」と素直に言えないものだ。その気持ちはよくわかる。でも悔しさをこらえて、「負けました。ありがとうございます」と声に出したところから、「次こそは負けないぞ」という反省と闘志がわき出てくる。

⇒これは、今日の日経・教育欄の無署名のコラムに掲載された子将棋大会の運営にかかわった方のご意見だ。

「悔しい、うれしいという気持ちを素直に受け止め、次こそは、次もまたと振り返ることこそが、学習の基本なのだと思う」ともいう。

全く「そのとおり」だ。ほとんどの子どもにとって第1の関門は高校入試、第2の関門は大学入試だ。第3の関門が就職試験や結婚へと続く。資格試験の受験も一発合格の幸運は素直にうれしいが、難関試験は何度も受験が続く。

悔しさを人前で素直にいえる子や孫に育てたいが、子どもや孫から失敗の悔しさを直接聞いた親や祖父母はどう対応すればよいのか。これは難しい。

なぐさめの言葉をかけてやることも、激励の言葉をかけることも、大切だがまず「よく頑張った、よくやった」とほめてやりたい。子どもは何をすべきであったかよく分かっているだろうし「なんでこんなことになるのか」と自分を責める子は、必ず伸びるのだから。

「今ここで泣いちゃダメって思う時人って少しずつ強くなる」のだと教えてやるのもよい。

今日は、高校生から力強い言葉を教えてもらった思いがする。試験ではなく、闘病のことだ。65歳すぎから何回も大病を繰り返し、2つのがんサバイバーになったが、その度ごとに神さまのご加護を得た幸せを喜び、これからも「今ここで泣いちゃダメって思う時」を繰り返したいと願っている。

2017.7.4 加東市社協の監事を退任

本年6月20日、長く務めました加東市の公職を「社会福祉法人・加東市社会福祉協議会・監事」を最後にすべて任期満了・退任した。

社協の監事には、平成6年5月、滝野町社会福祉協議会監事に就任、引き続き平成18年5月、加東郡3町の合併により設立した加東市社協の監事に就任した。

社協の総務、財務、組織運営に関連して、3町社協の合併と本年4月に実施された「改正社会福祉法」へ対応に関与できたことをうれしく思う。

社協の事業は、大きく①社会福祉事業 ②公益事業 ③介護

保険事業 ④収益事業に4分類される。なお、加東市社協は、介護保険事業を公益事業部門に含めて運営している。

社会福祉法人が行う事業の内、①販売業、製造業その他の政令で定める事業及び付随して行われる行為にかかる事業が該当する。②継続して営まれること。③事業場を設けて営まれること。の要件を充たす場合は収益事業に該当する。

政令で定める事業は34業種が限定列挙されているが、現在、加東市社協が行っているのは、①物品販売業（特産グッズやお土産販売）②不動産貸付業（飲食店舗貸付）③請負業（施設管理受託・指定管理）④浴場業（温泉場経営）がある。

なお、この内、事務処理の受託等の請負のうち、実費弁償により行われるものであり、概ね5年以内の期間に限って所轄税務署長の確認を受け「免除申請」を行ったものは除かれる。

また、①居宅サービス事業のうち福祉用具貸与以外の事業、居宅介護支援事業、施設サービス事業は、収益事業の中の医療保険事業に該当するが、社会福祉法人が行う医療保険業は収益事業から除かれている。②収益事業のうち非収益事業に繰り入れたものについては、一定の金額までは寄付とみなして課税されない。

平成12年に介護保険事業が開始されて以降、社協は居宅介護支援事業、在宅福祉事業等の収益により経営基盤の安定に努めてきた。最近、これらの事業で一部、赤字が続いているが担当職員が経営改善に取り組んでいる。

今後とも引き続き、加東市社協事業の統一テーマ「ささえあい みんなが安心 福祉のまち～一人ひとりの笑顔 温もり輝きを～」に従い、①まちづくり ②生活を支える ③人づくり ④介護保険 ⑤組織づくりに、役職員一丸となって精励さ

れることを期待いたします。

2017.7.25 朝日歌壇から 朝日7/24

汝の歳に四人の子ありきと妻を娶らぬ四十路の子にいう

（三原市 岡田独甫） 選者：馬場あき子

選者評：妻を娶らぬ息子にねじれる親の心が直接ながらしみじみ読み取れる。まさに今日の問題。

⇒たとえ、わが子への切実な期待でも「こんなことを言ってお終いだよ」。車寅次郎の声が聞こえる。

・50歳まで一度も結婚したことがない人が2015年に男性で4人に1人、女性で7人に1人いたことが、国立社会保障・人口問題研究所の調査で分かった。こうした人の割合を示す「生涯未婚率」は、10年の前回調査から男女とも3ポイント以上増えて過去最高を更新した。

同研究所が昨年9月に公表した出生動向基本調査によると、「いずれは結婚したい」と考える18～34歳の未婚者の割合は男性85.7%、女性89.3%だった。

高水準だが、「結婚資金」や「結婚のための住居」の確保が障害と考えている人が多く、研究所の担当者は「非正規労働者の増加も生涯未婚率の上昇に影響している」とみている（朝日2017/4/5から）。

⇒34歳までに結婚しなかった男女が「生涯未婚」になる確率が高い。女性なら30代までに、男性なら40代までに何としても伴侶を見つけない。たかが結婚、されど結婚。本人の意見やご縁も大切だが、「えいやっ」と決める「耳かき一杯」程度の勇氣はいる。頑張れ、若者諸君。

いまどきの年よりはいいなあど今時の若者は年金暮らしを羨

しむ (横浜市 折津 侑) 選者：佐々木幸綱 選者評：なし
⇒後期高齢者が集まると話題は健康の話か、孫の話か、年金の話になる。年金の話題になると「年よりの年金暮らしはいいなあ」と将来の若者の年金を気遣う。よくある光景だ。

ただ、若い時の働き方により、自営業であったため国民年金のみであったり、健保・年金加入企業の従業員であったため厚生年金であったりする。年金の違いで、年間給付額は天と地ほどの差があるのだ。従って、爺や婆は子どもや孫には正規社員になってほしいと願うことになる。

就活の失敗や本人の選択次第で、非正規社員やパート、契約社員になる若者も多い。でも、悲観することはない。就活再挑戦、大学院で学び直しなど正規社員へのチャンスはある。頑張れ、若者諸君。

2017.7.31 今日の朝日歌壇から

^{はんげしやう}半夏生水のしぶきを浴びるまで鮎止めの滝に近寄りにけり
(三島市 森島久志) 選者：高野公彦

選者評：暑い半夏生7月2日ごろの作だが、内容は涼感たっぷり。

⇒私の住む街の鬮竜灘は、加古川中流の加東市上滝野(対岸は多井田)にある景勝地。石英粗面岩の奇岩怪石が川床に起伏し、激しい流れが岩の上を走る。

名称は幕末の詩人梁川星巖の詩による。ここは舟運の難所であったが、近世初期に旧滝野の庄屋、阿江与助が、岩盤を削り「掘割り」(人工の水道)にして以来、高瀬舟が往来する加古川水運の中継地として栄えた。

また、昔から「飛び鮎」の名所として知られ、「架け樋」の下

流直下の滝つぼに作った水たまりから落差を飛び上がって集まる鮎を籠に集める独自の漁法(架け樋漁という)がある。

私は、1978年8月、旧滝野町に開園した「播磨内陸中央公園」が、鬮竜灘、光明寺を一体として開発工事が始まったとき、「鬮流灘のような比較的小規模、かつ自然そのものを母胎とする景観は、地域住民が、心の広場として利用することから開発を進めて欲しいと願っている。

そのためにはまず、鬮竜灘に架かる錦雲橋までの小さな板の橋を鋼鉄製として、危険個所にはすべて手すりをつけ、自然を損なわない程度に小さな遊歩道を広範囲に走らせ、ところどころに固定式ベンチを取り付けることを提案した(バランスくずさないで・新東播 1978/1/1)。

その後、播磨中央公園と名称が変更され、整備が進み、県下最大の桜の名所になった。

加古川線の電化も実現。鬮流灘に架かる「錦雲橋」はコンクリート製の「水中橋」になり、私の期待通り、地域住民のいこの場として利用されている。

ところが、上流に農業用水取水用のダムができていたこともあり、鬮竜灘の水量が少なく、農繁期以降は歩いて渡れる程のみずぼらしい川になる。これでは、加古川が水なし川になる時期が出てくる可能性すらある。

この度の加古川大改修工事で上流から流れてくるゴミは激減するが、川辺の景観、水資源、鮎をはじめ川魚保護が心配だ。以前の河川改修では鬮竜灘の岩石は障害物の代表。合併前の滝野町時代に爆破する計画まであった。

鬮竜灘は親水のモデルだ。鮎が加古川大堰の魚道を昇って、昔の飛び鮎や川ガニ(モズクガニ)漁が再現すればうれしい。

終戦後かなり長い間、地元では掘割りに木製の堰を作って、川水を滝の側に誘導していた。私は、今回の加古川大改修と同時に遠隔操作の可能な「電動・可動堰」を造ってほしいと提案している。

ただ、この提案、川筋に育った者にしかわからないだろう。

2017.8.7 今日の朝日歌壇から

もっと大きくなるはずだったと言いたげな完熟トマトのお尻の裂け目 (東久留米市 関沢由紀子) 選者：馬場あき子

選者評：なし

⇒作者はトマトの収穫をしながら、小さくて大きくなれなかったトマトを愛おしんでいる。この歌を自分のサラリーマン人生に置き換え感無量の人も多いだろう。

「勉強で約20年、会社に勤めで約40年、老後の20年」というのが人生80年時代であった。近年、定年も55歳から60歳になり、今や望めば65歳まで延長可能になった。

平成になってからは「勉強と遊学で約25年、会社勤めで約50年、老後の25年」が現実的になろうとしている。人生100年時代が迫りくるのだ。

・「ライフ・シフト～100年時代の人生戦略」(リンダ・グラットンら著)は、2007年生まれの子の半数が何歳まで生き残るか、主要国の予想を紹介している。最長は日本で107歳、欧米各国は102～104歳。「いま50歳未満の日本人は100年以上生きる時代を過ごすつもりでいたほうがいい」。これが仕事や社会のあり方を根本から変えるという主張である(今日の日経・オピニオン 就労寿命 延びる未来は65歳以上の働き手生かせ 論説委員長 原田亮介稿)。

⇒人生100年の割り振りで「勉強、就労、老後」のどの部分が伸びるか。当然就労だという意見に異論は少ない。現実には労働市場で地殻変動が始まった。65歳以上の働き手が急増しているのだ。

・今年1～3月の労働力人口を5年前と比べると、65歳以上では200万人増えた。65歳未満の生産年齢人口は減り続けるが、年齢に上限がない労働力人口は女性の増加もあって5年連続で増加傾向だ。直近の総数は90年代以来の6,700万人台に達している。

特に65～69歳は、6割近くが労働市場に残る選択をしている。人口が多い団塊が労働力を押し上げた面もあるが、同世代の中の働きたい人の比率が継続的に増している(日経・前掲)。

⇒この傾向を捉え、国は「65歳以上の働き手を生かす」。働き続けて現役並みに稼ぐ高齢者を増やして「年金開始年齢を引き上げる」ことを政策課題にする。

ただ人生100年時代の多様な生き方は、高齢者自身が作り出すことであって、伸びた寿命が就労寿命だと短絡的に考えることは哀しいことではないか。

日本人は人生の生きる全時間の過ごし方配分を知らず、子育てや家族を犠牲にして、働き続ける社会は日本をどこに導くのか。日本には老齢になれば隠居というすばらしい慣習があったのではないかと思いたくなる。

「もっとすばらしいはずだったと思いたくなるわが人生」とならないように伸びた寿命の使い方を考えてみたいものだ。

2017.8.14 今日の朝日歌壇から

はるばるとお盆に帰る子の気持ち都会うまれば知る由もなし

(宮崎市 田中浩一) 選者：馬場あき子 選者評：なし

⇒お盆を迎え、都会に住む子どもが孫を連れて帰ってくる。目的はご先祖様の墓参りだが、それ以外に地方の野外活動を満喫するためだ。普段住んでいる都会には、あらゆる快樂施設があるが、地方の山や川遊びはまた楽しいのだろう。

私の長女は税理士事務所を継承するため、大学入学以来10年間住んでいた都会から戻り、自宅近くに居を構えてくれた。次女、三女は都会（阪神間）に住んでいる。お盆と正月には、配偶者と共に親元に戻って2～3日滞在する。どこにでもよくある風景だ。

小さい孫は、多可町八千代区の川遊びに行くことが定例コースだ。中学、高校の孫は「いとこ遊び」に興じている。この歌の作者のように、子どもが孫と一緒に、はるばるとお盆に帰ってくれるのはいつまで続くことだろう。

作者は「都会生まれの孫は、親の気持ちを知るまい」と気に病んでいる。だからこそ、子や孫が義理堅く田舎に帰ってくれる間は頑張るって生きてやりたい。せめて、高校卒業、いや大学卒業までと欲深く思うことだろう。

人口減少が一段と深刻になり、1年間に生まれてくる子どもの数が100万人を割り込む。一方死亡者は130万人にせまる。

少子・高齢・人口減少が顕著な地方は日本の近未来の縮図だ。子の代が過ぎ、都会生まれの孫が地方に帰って来なくなり、地方に住む親が亡くなり、その住居が空き家となり、やがてそれも朽ちて空き地となる。地方の菩提寺では檀家が減少し、先祖のお墓までなくなる。さびしいことだがこんな光景が日本国中で広がっている。

多くの地方都市は、Uターン、Jターン、Iターン、移住受け入れなど人口増加策の重要性は十分理解しているが「人の流

れ」を変えることは容易ではなく手詰り状態、当面の自治体経営と対症療法に精いっぱいだ。

お盆に子や孫が親元に帰らなくなれば、地方の疲弊はホンモノになる。それでも地方はあきらめない。地方の疲弊がホンモノになる前に、地方人の英知を結集して「地方」を守りたいと願っている。

昭和55年1月1日、当時の地域紙「新東播」に書いた『帰省中の青年に訴える』の文末「君たちにとって郷土は、必ずしも都会の大企業従業員を育てるための『肥育牧場』ではなかったのだから」を思い出している。

2017.9.21 鬮竜灘の笊漁 今日神戸新聞から

兵庫県加東市上滝野の名勝・鬮竜灘でアユやハイジャコなどの魚が、伝統漁法「笊漁」の仕掛けにかかって次々と岩床に打ち上げられている。台風の影響で加古川の水量が増えて流れが速くなり、流されて遡上しようとする魚とみられる。同市観光協会は「全国的にも珍しい漁法。岩場に近づきすぎないように気を付けて見てもらいたい」と呼び掛けている。

⇒私は、毎日のように加東市上滝野の鬮竜灘を覗くが、最近では実際にアユやハイジャコが飛び跳ねる様子は見たことがない。「飛鮎や飛雑魚」は、水量、水温、時間帯により微妙に異なり実際に見ることは難しい。

笊漁は「昭和40年代まで行われていたが、水質悪化や堰ができたことなどで下火になった」。ところが、現状は下火どころか、ほとんど見るのがなくなって久しい。

加古川上流のパルプ工場の廃パルプ液や染色工場の染色汚水で「泡が一杯、真っ黒の水」が流れていた時期を除き、加古川

下流に取水堰ができたことも大きく影響している。

最近では^{かけひ}笥樋の仕掛けは、観光客向けに設けてあるが、魚が打ち上げられる様子は、例年、増水した直後に時々見られるというさびしい状態になっている。

・江戸時代から継承される笥漁は、滝水に飛び付くアユの習性を利用した漁法。川の水を「樋」で岩場に引いて人工の滝を作り、アユを遡上させる。滝を昇り損なったアユが岩床に打ち上げられ、跳ねながらかごの中に落ちる。

⇒私が小学生の頃までは、毎年、鬮竜灘の笥漁は地域住民の楽しみであった。また、奇岩、怪石、激流の鬮竜灘のすぐ上流の小荒場^{こわんば}で水泳をし、サイ針というツケ針漁法で、田んぼの溝で獲った泥鰌を餌にして、ナマズ、ギンタ、たまに鰻を獲ったことが懐かしい。

最近、鬮竜灘下流で加古川大改修工事が始まり川幅が大きく拡幅する。川の安全性が増すことはうれしいが、鬮竜灘の水量の減少が危惧される。

加古川本流は、鬮竜灘のすぐ上流の小荒場で、本流は鬮竜灘に、もう一方は「掘割」と称する浅瀬の水路の二手に分かれる。

昭和40年代頃までは、夏場の水量の少ない時は、この掘割に人口の可動堰を作り、鬮竜灘側の水量の減少を防いで飛鮎を楽しむんだ。

私は、加古川大改修の際には「鋼鉄製の電動可動堰」を築造することを期待している。浅瀬の水路を拡幅して本流を付け替える発想は過去に何度もあった。

残念なことだが、私の提案が評価されることはない。今や、ここにでもある小さな観光地、河川改修効率第一主義かと思いたくなるのは川筋に育った者のひがみだろうか。

※掘割は、慶長十一（1606）年丹波本郷からの貢米を高砂港まで輸送するため、滝野の阿江与助たちが川底の岩石を除去し浅瀬に水路を通した。以後加古川舟運は長く栄えた（阿江与助像の解説文から）。

2017.10.14 今日の日経歌壇から

一万歩歩くを日々の目標にする僕の台風の日の九歩

（吹田市 エース古賀） 選者：穂村 弘

選者評：歩数の大差が面白い。「九歩」で何をしたんだろう。

⇒私は、数え年3歳、終戦の前の歳の秋に、脊髄性小児麻痺（ポリオ）に罹り、生涯、歩行には不自由したが、それ以外の大きな病気や怪我をすることもなく幸せな人生を送ってきた。

ところが、65歳を過ぎた頃から酷い腰痛に悩まされた。生涯、不自然な姿勢で歩いてきたから仕方がないと諦め、かかりつけ医でもらう鎮痛剤を飲んで痛みを抑えていた。何もしないとダメだと思い64歳の春から高室池スイミングプールで水中歩行を始めていた。負担の少ない水中といっても始めは全く歩けなかったが、若干の指導と励ましを受け、何とか歩けるようになった。

それでも68歳の暮れにはほとんど歩けなくなり、その原因が化膿性脊髄炎（後に脊椎炎）と判明、抗生物質投与、絶対安静治療のため市立西脇病院整形外科に入院。58日間、24時間、ベッドに上向きに固定されたままで過ごした。これは地獄の治療だった。

3度目の抗生剤の点滴がよく効き腰痛はなくなったが一步も歩けなくなり引き続き、みきやまりハビリテーション病院に75日間入院、リハビリ治療を受けた。

退院後は、手すりのある播磨中央公園やJR滝野駅のスロープで歩行の自主トレを行った。プールの水中歩行も再開した。

1万歩どころか、500歩も歩けばフラフラになった。この時、介護認定が「要介護2」になったが、介護保険を使うことなく6か月後に認定を返上した。よく頑張ったと自賛したくなる。

その後、少しずつよくなったが、今度は69歳の秋になって前立腺がんが見つかり、放射線治療のため兵庫県立がんセンターに40日間入院した。

さらに、74歳の秋になって除脈と消化器がんが見つかり、最初にペースメーカーの植え込み術のため加古川東市民病院に入院、引き続き消化器がん摘出手術のため県立がんセンター入院した。

このように老年期になってから大病を繰り返したが、多くの周りの人に助けられ、不自由はしているが、1日も寝込むことも無く、毎日、事務所にも出て、本年5月まで公職をも務めながら後期高齢者になった。うれしいことに前立腺がんも消化器がんも再発はなく、今は経過観察を続けている。

大病をしても「神さまに生かされている」幸せを感じている。歩行訓練を絶やさなかったことと、スイミングプールを止めなかったことは自慢できる。

今は、1人でプールに行くのは転倒リスクがあり、怖いので家内と共に週4回、火・木・土・日の昼間時、利用者の少ない時間帯に1時間。水中歩行と自己流のクロールとジャクジーで過ごす。12年間続けていることになる。

最近では、歩行には相変わらず難儀しているが、事務所の屋敷内に15メートルの手すりを作り、プールに行かない日に300～500メートル歩く。これが日課になっている。

プールと歩行とを目標にする“僕の雨の日の九歩”—私の「九

歩」はせつない。

2017.10.17 海外旅行の思い出

1982年頃から何度も海外旅行に出かけている。団体旅行であったり、主催旅行であったり、個人旅行であったり、いろいろである。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、アジアの国々を十数回旅行した。以下、ロータリークラブ入会後の記憶に残るものから

①1983年12月～84年1月（42歳） サンフランシスコ・ロスアンジェルス・ラスベガス・サンディエゴ

私が関西学院大学商学部助手補をしていた頃からの友人で、当時、近畿大学教授をしていた來住元朗さんがサンフランシスコ州立大学に留学していた。

2人で、西海岸の都市を旅行しようということになり、年末から年始にかけ2週間、アメリカ西海岸を旅行した。

その際、1908年、世界で2番目に誕生したサンフランシスコロータリークラブの例会に出席しバナー交歓をした（83.12.27）。

ビジター紹介の後、Is there anyone here who can speak Japanese? と大きな声で発言したが会場はシーン。例会終了後になって会員の加州住友銀行サンフランシスコ支店長が私の席に来られ安堵、しばし歓談させていただいた思い出がある。

初めて一人で行くアメリカ、初めての海外クラブのメーキャップ、何もかも緊張の連続であった。

②1989年6月（47歳） 釜山・慶州南道・ソウル

R I ソウル国際大会に夫婦同伴で参加した。当クラブからの参加者25名。

③1990年6月（48歳） サンフランシスコ・ホリスター、ロスア

ンジェルス

滝野町と米ホリスター市姉妹提携調印式に団員として出席、記念行事に参加。ホリスターRC会員と懇談・バナー交換した。

④1993年5月(52歳) ブリスベン、シドニー、メルボルン
シドニーRI世界大会に次女同伴で参加した。当クラブからの参加者20名。

⑤1994年4月(53歳) 台湾
台北RI世界大会に夫婦同伴で参加した。当クラブからの参加者10名。

⑥1996年9月(55歳) バンクーバー、カナディアンロッキー、トロント、ナイアガラ
兵庫県信用組合40周年記念旅行でカナダ横断観光旅行に長女同伴で参加した。

⑦1997年6月(56歳) スコットランド・セントアンドリュース・エジンバラ
グラスゴーRI世界大会に夫婦同伴で参加した。当クラブからの参加者11名。

⑧1999年7月(57歳) シンガポール、マレーシア
シンガポールRI世界大会に、小野ロータリークラブ会長として夫婦同伴で参加、当クラブからの参加者24名。

⑨2000年5月(59歳) 西安・敦煌・榆林窟・北京
一度行っておきたかった西安・敦煌と当時小野RCが推進していた地球緑化運動の砂漠緑化体験ツアーに松井秀一会員を誘って夫婦同伴で参加した。

⑩2001年8月(60歳) 北京・万里の長城・嘉峪関・上海
前回行けなかった万里の長城と中国主要2都市を夫婦同伴で観光旅行した。

⑪2003年7月(62歳) サンクトペテルブルク

高校時代の友人夫婦らと共に夫婦同伴でロシアに。7月24日夕刻、サンクトペテルブルク・ネバロータリークラブにメーキャップした。

私は紹介されて、英語でスピーチをした。ここはロシア、何でも喋ろうと勇氣百倍。「人生夢浪漫」「ポリオに罹病とポリオ撲滅運動」をベースに予め準備した原稿で英語のスピーチ。日本ではこんな話はしたこともないし、またすることもない。

驚いたことには、当時直前会長であったイリナ・リブシーさん(サンクトペテルブルク大学准教授)が一区切りごとにロシア語に通訳してくれた。お陰で大きな拍手をいただき本当に嬉しかった。

⑫2004年10月(63歳) ニューヨーク・ロチェスター・ナイアガラ

高校時代の友人夫婦らと共に、夫婦同伴でホテル近くのコンベンションホールで開かれている世界光学トレードショーへ。その後、ロチェスター大学光学研究棟で行われているロチェスターロータリークラブの例会にメーキャップした。突然のメーキャップにもかかわらず自己紹介をさせていただき、バナー交換をした。

⑬2005年9月(64歳) 長春・ハルビン

高校時代の友人夫婦らと共に、陸軍の職業軍人であった父の任地、旧満州国の遺産めぐりに夫婦同伴で旅行した。

⑭2006年9月(65歳) スイス・フランス。アルザスワイン街道
高校時代の友人夫婦らと共に夫婦同伴でスイス、フランス北部を旅行した。

⑮2011年9月(69歳) フランス・マルセイユ・リヨン・パリ

前立腺がんが見つかり、この治療入院の前にこれが最後になる海外旅行の記念にと高校時代の友人夫婦らと夫婦同伴で観光旅行をした。リヨンロータリークラブにメーキャップを申し出たが叶わなかった。

独りでは何もできない私を助けて海外旅行に同伴してくれた私の家族と、何回も私を誘ってくれたロータリーのよき友人と高校時代の友人夫妻に感謝している。

2017.10.30 今日の朝日歌壇から

こんな時に電話とメールで香典の額を確認している我ら

(松阪市 こやまはつみ) 選者：永田和宏

選者評：厳肅な時ほど俗事に関わらざるを得ないのが我ら人間の性。

⇒今日も組内(隣保内)の葬儀の連絡を受けた。家族葬だそう。香典は、明治以前は近隣の人々の相互扶助精神から米や麦、野菜などの食物香奠が普通であったが近年、金銭香典が当たり前になった。

作者のように困るのは香典の金額ばかりではない。香典返しだ。私たちの地区では以前に香典をもらっておれば、同額の香典(義理の香典)を持参し、葬家は即日半返しを行う(近年、地区内の半返しは行わない)。どちらを欠いてもならないので葬家は香典帳を調べて義理の香典を持参する。

家族葬は、ごくごく親しい人だけで行う。身内だけで静かに別れの時を過ごす。このほか、全く家族だけの密葬がある。これらの葬儀は、ほとんど香典を辞退されるので、過去に香典をいただいている方が家族葬や密葬をされると実に悩ましい。

「葬儀は行うが香典は固く辞退したい。生前にご縁をください

た方からの弔意は大切にしたい」「香典を辞退することで、子や孫が香典帳を調べて義理返しを行うのは勘弁してほしい」。これが多くの方から聞く葬家の本音だ。

評者は葬儀の厳肅なことは認めるが俗事だとも述べている。少子高齢社会になり葬儀は増えるが、葬家の子どもは都会住まい。家族葬が増えるのはやむを得ない。ただ、評者のように葬儀を「関わらざるを得ない(愚かな)人間の悲しい性」とばかりは言えまい。葬家にとって葬儀を営むことは大切に厳肅な行事だと考えたい。

※10年くらい前までは、葬家は葬儀や香典返しの義理を果たす意味もあり、香典の中から地域の社会福祉協議会に相応の寄付を行う慣習があった。最近はこのを行う方がめっきり少なくなった。残念な思いがする。

2017.11.4 今日の日経歌壇から

ひたすらに年を重ねて手をさすり足をさすりて秋の夕暮れ

(東京 麻耶沙羅) 選者：三枝昴之

選者評：さすって耐える行為に追い打ちをかける「秋の夕暮れ」が老いの嘆きを深める。

人生は秋から冬へ移りゆくされど冬にも良き日和有り

(岡山 磯田 清) 選者：三枝昴之

選者評：同じ老いだが日溜まりの心地よさを思わせる。

⇒手や足をさすっている麻耶さん、日溜まり心地よさを感じている磯田さん、どちらも80代後半だろうか。

昨日は関西学院大学のホームカミングディ。51周年以上前の卒業生(昭41年卒以前)はメインゲストとして招待を受ける。

私は自宅から車で参加、ゼミの友人6人が関学会館に集まり

食事、続いて学内を散策して楽しいひと時を過ごした。

広い大学構内の施設が広く開放され、各種イベントや出店に参加している在校生と、卒業年次に関係なく集まった老若男女の同窓生でいっぱい。阪急甲東園駅や仁川駅から参加者の列が続いていた。私は広範囲の歩行は困難なので友人が車いすを押してくれた。

卒業後50年以上が経ち、これが最後かと参加された80代後半の方を何人もお見受けし、この幸せを一身に感じた。

当日の記念品袋にはいていた広報紙の中に、高等教育推進センターが実施した「関学に入学を決めた最も重視した理由」の調査結果が掲載されていた。

①ブランド ②教育内容 ③就職に有利 ④校風 ⑤偏差値 ⑥周囲の進め ⑦キャンパス ⑧その他 の順。

偏差値が一番ではないがブランドが一番とは驚き。ブランドなら数段上になる有名国公立大学がいくらかでもある。キャンパスが7番、これはどこの大学にも負けないだろう。

私も後期高齢者になり、同窓生にも物故者が増え始め、ほとんどがサラリーマンだった友人はみな退職して、今はそれぞれの老後生活。勤務中の海外の思い出から、病気から、家族のことまで、話題は尽きない。「人生のたそがれ」に集える友人がいることはうれしい。

ひたすらに年を重ねて 足をかばいて車いすで秋の夕暮れ
人生は秋から冬へ移りゆく されど同窓生に出合える良き日も
あり

2017.11.6 今日の朝日歌壇から

新米のかがやくを盛るふる里は限界集落と言はれて五年

(国分寺市 越前春生) 選者：高野公彦

選者評：少数の人々で稲作を続けているのだろう。

選挙カーさえ来ぬ村の廃屋の壁にも地方創生のビラ

(静岡市 安藤勝志) 選者：永田和宏 選者評：なし
在りし日に父が書きたる表札を最後に外し更地となりぬ

(郡山市 菊池亮子) 選者：馬場あき子 選者評：なし
⇒地方が衰退する話題から3首、それぞれに「その人にしか分からぬ」実感が込められている。

第一首、関東圏に土地勘がない私には、国分寺市のことは同市に住む知人から聞いている範囲に留まる。東京都のほぼ中央に位地し、JR中央線はじめ鉄道網が縦横に走る武蔵野台地の高級住宅都市・文化都市のイメージが強い。

東京のど真ん中に「限界集落」があるとは思えないので、作者は出生地のふる里を詠んでいるのか。

進学のため18歳で都会に出て、就職、結婚、居を定め、子育てをして、今は家族全員が完全な都会人。ふる里に残した老親が気がかりだが、5年も前から限界集落となりては帰りようがない。

第二首、地方の首長や議員選挙ならともかく、選挙区が広い国会議員選挙では、選挙民が少なく選挙カーさえ来ない地方の村は多い。

ただ、村の廃屋の壁に貼られた「地方創生」の選挙ビラの空虚さにさびしさを感じる時はもう過ぎた。

「私の代でこの村は廃村になる」のではないかと心配が先にくる。過疎の村は中央政治の関心になりにくい。一方、過疎の自治体には村の維持になすべき知恵も財力もない。人口減少、少子高齢化の進展で地方の衰退は避けられない状況だ。

第三首、わが生まれしふる里の家屋が、親世代の死亡や子ど

もの都会住まいで誰も住まなくなり、空き家となり、廃屋となり、やむなく取り壊して、「在りし日に父が書きたる表札を最後に外し」て、故郷の廃家は更地になった。次は、檀家離れ、廃墓や墓転を考えるのだろう。こんなさびしいことが過疎の現実だ。

発展途上のアジアの国々を旅行しても、日本なら廃屋同然の不出来な家屋に住む人を見ることがあるが、廃村で人が住まなくなった村を通ることなかった。

米欧の先進国ではメディア情報で知る限り、人が住まなくなった幽霊都市があるようだ。廃屋ばかりか、廃工場が林立して、舗装道路以外は雑草と雑木の林。トランプ大統領を支持した米・ラストベルト地帯は幽霊都市寸前の白人の街があるという。

日本がこうなる前に始まった政府の「地方創生計画」が「過疎のふる里」を守ることに繋がってほしい。過疎地域を選挙区に持つ「地方選出国會議員」の理解と今後のご活躍に期待している。

2017.11.11 今日の日経歌壇から

墓石の位階勲等哀れなり骨になれども褒められたいか

(東京 東賢三郎) 選者：三枝昂之

選者評：死んでも拘る位階と勲章。人の価値はそれぞれだが、軍医兼文人として大きな足跡を残した森鷗外の墓に刻まれた「森林太郎墓」の清々しさをやはり思い出してしまう。

胸だってきれいな形だったじゃない自分を褒める最後の方法

(奈良 渡辺春乃) 選者：穂村弘

選者評：「自分を褒める最後の方法」の意外性と切実感に胸を打たれる。

⇒第1首。有名人の戒名はネット検索で簡単に調べられる。日本で一番長い戒名は徳川家康。葬儀は増上寺で行われ「安国院殿徳蓮社崇誉道和大居士(院殿号)(蓮社号)(誉号)(戒名)(位号)」という浄土宗の戒名がつけられた(Wikipedia)。

戒名は宗派によって異なるが、加東市の光明寺山4か寺は真言宗。戒名の頭に大日如来を表す梵字が書かれている。戒名にランクなどないはずだが、真言宗戒名の普通ランクは6文字の居士・大師だ。

森鷗外の墓は、島根県津和野町の永明寺にあり「森林太郎墓」と刻まれている。本名を林太郎という。以下、鷗外の遺言の一部から

・余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス書ハ中村不折ニ委託シ宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメラ請フ手續ハソレゾリアルベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容赦ヲモ許サズ 大正十一年七月六日 森林太郎(森鷗外記念館HPから)。

⇒鷗外に倣い、遺言にまでしなくてもよいが、死ぬときは普通の戒名がよい。普通に生まれ、普通に大きくなり、普通に死んでいくのは大変なことだ。

ただ、死んで灰になるのは仕方がないが、ゴミにはなりたくない(検事総長・ミスター検察 伊藤栄樹著：人は死ねばゴミになる一私のがんと闘い 1988)。

第2首。「乗り越えられない(と思われている)試練を乗り越えた苦労の時」や、他人には何でもないが「自分にはできないと諦めていたことができた時」は、自分で自分を褒めたくなる。

その1つが後期高齢者の今日まで無事に「生きてきた」ことだ。いや、(神さまに)「生かされている」ことだ。

幼時の大病で生涯不自由な生活を余儀なくされたが「私の周りにはいつもよき理解者がいた」ことに感謝している。

よく頑張ったなあ。自分で自分を褒めたくなる 最後の独り言。

2017.11.25 今日の日経・歌壇から

親として為し得る限りを果たし来て少しの酒に酔ふが楽しき (愛西市 坂本二男) 選者：三枝昂之 選者評：なし
⇒作者は親として「子に為し得る限り」を果たした喜びを「少しの酒に酔ふが楽しき」と言っているが、心の中では子に感謝しているのかも知れない。

50歳まで一度も結婚をしたことがない人の割合を示す「生涯未婚率」が2015年の国勢調査の結果、男性で23.37%、女性で14.06%にのぼった「結婚離れ」が進んでいる(政府統計から)。

従って、結婚して子をもうけ、子育てをして、子の独立を喜ぶことは誰でもできる当たり前で、普通のことだとも言えない。生涯、結婚しない人も子をもうけない人もいるのだから。

戦後、長く親の喜びは「子の無事誕生」を祈ることから始まり「這えばたて、立てば歩めの親心」の言葉のごとく、親は子育てと教育に最善を尽くす。

「親は無くても子は育つ」「放っておいても子は育つ」と言ったのは昭和の年代まで。最近、幼児教育から小中学校、高校を経て大学等への進学位までの子の教育は親の責任。それから後は子が自由にすればよいと考える人が多い。

今の世の中、親が子に求める「子の義務や責任」など何もない。「親の看病と介護は子供の務め」と恩着せがましく言う人も

いるが、できることなれば、子に見返りや恩返しを期待することなく静かに老後を通したい。

「親は子に為し得る限りを果たし少しの酒に酔ふが楽しき人生」を送るのは幸せでうれしいことだ。

2017.12.2 今日の日経歌壇から

逝く時は母より後で子より先夫を送りしばし遊びて

(常陸太田 加藤れいら) 選者：三枝昂之

選者評：順当な人生の終わり方を思わせるが「しばし遊びて」が共感を誘う。

この子より一日長く生きたいと語る友あり茶を飲みながら

(三島 難波寿子) 選者：穂村 弘 選者評：なし

⇒昨日は、20代の終わりから、青年会議所活動を通じて交友のある昭和15年・辰年、16年・巳年生まれから19年・申年生まれまでの7人が集まった。

この会(辰巳会)は毎年、年末に集まるが30年以上続いている。当初のメンバーは12人だったが今は8人。4人が亡くなった。理由は、がんによる。残る8人の内、がんの治療経験のないのは3人。お互いの健康と幸せを祝福した。

話題は病気や近況など多彩、すでに全員が高齢者になり、事業は後継者に承継している。全員、すでに父母を送り今は夫婦2人の老人世帯。幸せなことに子を送った者はいない。このことだけでも幸せでうれしいことだ。

第1首：この歌の作者は女性だ。順当な人生の終わり方を母(実母と義母)より後、次は夫、そして自分、最後は子と考えている。長い生涯、病気や怪我で何が起こるか分からないのは世の常だが、多くの高齢男子の希望は「妻より先に逝きたい」が

本音だろう。妻に看取りをお願いできる夫は幸せなことなのだ。

逝く時は父母より後で 妻や子より先 父母を送りてしばし安堵す

第2首：この歌の作者も女性だ。「この子より一日長く生きたいと語る友」が女性か男性かは分からない。しかし「この子」が可愛い子ではあることに間違いない。ひょっとして、重度の障害を持つ子かも知れない。

私には、茶を飲みながら生涯をほとんど病院のベッドで過ごす「この子より一日も長く生きたいと語る」知人がいる。「この子を残して先には逝けない」のだ

最近、東京2020年パラリンピック22の競技・537種目が決まった。今回特に、女子選手枠が多数確保されることになり、過去最大になる。社会のダイバーシティ化が進み、眼、耳、足や腕など体幹に障害のあるアスリートの活躍をうれしく思う。

私は大学時代の夏休みに、友人らと九州一周旅行をした際に長崎を訪れ、長崎医大放射線科の医師、永井隆の小さな自宅「如己堂（永井隆記念館）」を見学した。

その時知ったのだが、永井医師は「この子を残して—この世を去らねばならぬのか！」と言って、1951年43歳で息子誠一と娘茅野を残して逝った。後に読んだ随筆集「この子を残して」（永井隆著）が記憶に残っている。

ただ内容は覚えていない。反戦の随筆集と理解されているようだが、私には幼い子を残して先に逝く親の無念、申し訳なきが伝わってきた。

この子より一日長く生きたいと考えていた父母思う

2017.12.27 奇跡の一本松表札に JIJI COM 12/27から

東日本大震災の津波を生き延びた福島県南相馬市鹿島区の「かしまの一本松」が27日、伐採された。今年に入って枯れたため、周辺には津波対策の防災林が整備される。伐採された一本松を表札に加工し、地区に住んでいた住民に配るといふ。松の種から育った苗木は、防災林の一角に植えられる。

⇒今日の昼のNHKニュースで伐採の神事が放映されていた。伐採された松の木は表札に加工して地区住民の玄関に掛けられ、松の種から育った苗木は防災林に植えられ、東日本大震災の津波の記憶を後世代に引き継いでいく。

以下、私ごとながら

父が、戦後、自宅の裏庭に植えた柿の木が大きくなり、枝が大屋根に届く大木になって、柿の実が収穫できないばかりか、枯葉が屋根を傷めるようになった。仕方なく、3年前に植木屋さんに背丈程度に伐採してもらった。

柿の木の太い部分を捨てずに残して、よく乾燥させ、表札にするべく手作りで加工した。高齢者になり、電動のこぎりや電動かんなを使うのは恐かったが、2枚の表札板（7寸）を造り、地元の書道家にお願いしてすばらしい工芸品になった。柿の木は、その後、新しい枝が出て、年に数個の柿が採れるようになった。
・2枚の表札のうち1枚は「人生夢浪漫 乗り越えられない試練はない」、2枚目は「一期一会」。最初のフレー



ズは自著「人生夢浪漫」のはじめに書いた言葉。生涯、多くの方に支えられ、神さまやご先祖さまに守られ喜寿の今日まで生きてきたことに感謝している。

2017.12.28 若者の地方流出に危機意識を 日経・社説12/27から

その（アベノミクスによる日本経済の好調の）陰で日本の経済社会をむしばむ構造問題には、ほとんど手がついていない。人口減少である。人口減への健全な危機感を個人、企業、政府、地方自治体が三位一体になって強めるべきだ。

⇒私が、本年中に一番多くの意見を書いたのは、少子高齢・人口減少による地方の疲弊だが、画期的対応策もなく危機感も薄く「若者の地方流出に「健全な危機意識をもっと」と訴える日経・社説子にまったく異論はない。

・歴史人口学をひもとくと、20世紀初めに4,400万人弱だった日本の総人口は1967年に節目の1億人を突破し、今世紀初めに1億2,800万人の頂点に達した。

仮に、男女の年齢別生存率と合計特殊出生率が2004年の水準のまま推移し、かつ移民を受け入れないとすれば、22世紀初めの総人口は4,100万人台に減る。過去1世紀の増加分が帳消しだ。

⇒歴史人口学により、北播磨の人口推移がどのように変化してきたか。今後、どうなるのか。具体的に数字で知る方法を知らないが、高齢者の中には人口減に危機感を持つ人もいるが、多くは「仕方がない」と諦めている。

・国立社会保障・人口問題研究所は40年からの20年間に総人口が1,808万人減ると推計する（17年推計）。単純平均すると年間の減少数は90万人強だ。たとえば和歌山県ほどの自治体が毎

年一つずつ消滅するほどの衝撃である。

少子高齢化を伴いながら人口減少が加速することは、今世紀に入る前からわかっていた。その間、日本の人口政策はぶれ続けた。

⇒昭和初期には産児制限運動が盛んになり、政府は移民送り出しを奨励した。日米開戦を前にして1941年には「産めよ 増やせよ」。敗戦後は人口過剰論が台頭。74年には、日本人口会議が「子どもは2人まで」と大会宣言にうたった。

日本の年間出生数は第1次ベビーブーム期には約270万人、第2次ベビーブーム期には約210万人であったが、今や100万人の大台を割った。

これは晩婚化の影響が大きい。子どもを持ちたくないという夫婦が増えたわけではない。もちろん、産むか産まないかは各人の選択であり、望んでも子どもが授からない夫婦もある。

・着目すべきは医療・介護や年金制度が内包する世代間格差だ。学習院大の鈴木亘教授が一定の前提をおいて試算したところ、1945年生まれば3制度合計の生涯収支が3,370万円の黒字に対し、2010年生まれば3,650万円の赤字になる結果が導かれた。

負担・受益の両面で高齢層が有利な状況はある程度は致し方ないが、これだけの格差の放置は将来世代への責任放棄ではないか。

・3点提案したい。まず社会保障改革の断行だ。たとえば医療の窓口負担は、年齢で差をつけるやり方から収入・資産をもとに決める方式に変えるべきだ。巨費をかけてマイナンバーを導入したのは、そうした用途に使うためではなかったか。

次に子育て支援の強化だ。政府・自治体や経済界を挙げて待機児童を減らすのは当然として、とくに企業経営者は従業員が

暮らしと仕事を無理なく両立させられる環境づくりに意を用いてほしい。

最後にこれから生まれてくる世代への支援だ。夫婦が出産を諦める理由のひとつに晩婚化がある。結婚を望む若い男女を後押しするには、就労支援などを通じて出産の機会費用を下げるのが有効だ。

⇒人口減への対策として3点提案しているが、すでに言い尽くされた論点ばかりで新鮮さはない。北播磨の自治体が参考にしたい、できること、すべきことは、②の待機児童対策と③若者の地方での就労支援だ。

北播磨の市町では待機児童は少なく危機感はない。就労支援では、特段目立った施策は行なわれていない。Uターン、Jターン、Iターンなど「人口の地方回帰施策」の必要性は十分理解されているが「地方から都会へ」の人の流れは変えられないのが残念だ。それでも私は「若者の都市流出による人口減に健全な危機感をもっと」と訴えておきたい。